

## 〈第14回図書館総合展〉

# 「共読ライブラリー」初めてのフォーラム & ブース出展記 —図書館総合展「見る」から「出る」への365日—

辺見純子\*, 中嶋康\*\*

[抄録] 帝京大学メディアライブラリーセンターは第14回図書館総合展でフォーラムとブースのダブル出展を行った。2012年4月より4年間計画で実施している読書推進プロジェクト「共読ライブラリー」のブランディングが狙いであった。「共読ライブラリー」の概要と総合展出展までの経緯、出展の反響などを述べる。

[キーワード] 図書館総合展, 読書推進, 教育連携, 共読, 共読ライブラリー, 展示架, ブランディング

### 1. はじめに—この報告の意図

1年前の図書館総合展でフォーラムを聞いたり企業ブースを覗いたりしていたときには、まさか翌年の総合展に出展することになるろうとは夢にも思っていなかった。〈共読ライブラリー〉プロジェクトは2011年11月時点ではまだ影も形もなかったのだから。

それから1年。私たちは総合展を見る側から出展する側が変わっていたのだ。

この報告は総合展に来られなかった方々に帝京大学メディアライブラリーセンターが2012年4月から4年間の計画で進めている読書推進プロジェクト「共読ライブラリー」を知っていただくことを第一の目的としている。

また、プロジェクトの始まりから総合展出展までの経緯、総合展の報告であると同時に私たちにとっても総合展終了時点での振り返りの意味を持っている。

### 2. 「共読ライブラリー」導入の経緯

#### 2.1. MELICの概要

帝京大学メディアライブラリーセンター（以下、MELIC）は帝京大学八王子キャンパスの図書館で2006年9月に新館を開館した。学生数は約18,000人（全学生数約24,000人）。人文・社会科学系を中心に6学部（経済・法学・文学・外国語・教育・医療技術）12学科、短大2学科で構成されている。2011年度の入館者数は約80万人、蔵書数66万冊、職員数は13名（パート職員、委託は除く）である。

#### 2.2. 導入の経緯

新館開館以降、順調に伸びていた貸出数が2011年度初めて減少に転じ、「朝日新聞大学ランキング」のAランク入りを目指した「学生貸出数ひとり10冊/年」という目標も怪しくなってきた。

この「貸出数を伸ばしたい」、「Aランクを目指したい」という思いが「共読ライブラリー」を進める大きな原動力である。私たちは以前から教育・学習支援という観点と同時に貸出増のためにも教育連携を進めていかなければならないと考えていた<sup>1)</sup>。そのために「指定図書制度」「導入教育授業での図書館ガイダンス必修化」「POP展示を

\* Junko HENMI and \*\* Yasushi NAKAJIMA  
帝京大学メディアライブラリーセンター  
〒192-0395 八王子市大塚359  
E-mail: jhenmi@main.teikyo-u.ac.jp

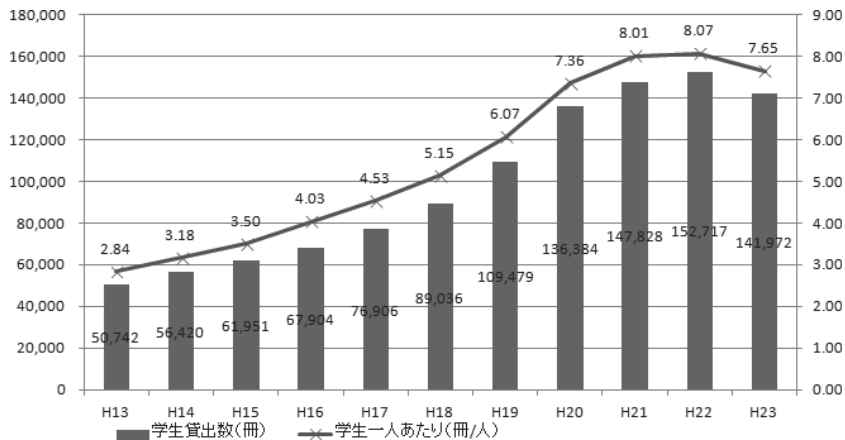


図1 MELIC貸出数の推移

中心とした読書授業連携」などを段階的に導入し、新館効果と相俟って2009年度には5年前の2倍の貸出数へと増加していた(図1)。

しかし、ここ数年の貸出は、微増→頭打ち→下降へと転換を始めた。すでに「新館効果」が期待できない以上、学生の興味を喚起しMELICに誘引する新しい企画、教育連携をより強くする企画を検討しなければならない時期にきていた。そのための方策の一つとして準備していたのが「新しい展示架」導入計画であり、これが「共読ライブラリー」を誕生させるきっかけとなった。

### 2.3. 展示架から共読ライブラリーへ

八王子キャンパスでは教育学部を中心に、「POP」や「本の帯」の作成・発表を取り入れた授業を行っている。館内の展示架では、学生自作のPOPや本の帯、教員の新著紹介、書評合戦ビデオバトル(2010年度からMELICで開催)での紹介本などを展示していた。また、WEB上で「先生の本棚」というお薦め本リストの掲載を始め、OPACの書評システムと連動した教育連携型企画展示を充実させたいと考えていた。

しかし、これまで行った展示の前をほとんどの学生は素通りしてしまっていたのだ。立ちどまってほしい、そして本を手にとってほしい。そのために既成の展示架ではなく、「学生の興味を引くクールで個性的な展示架」であり「展示架を使ったコミュニケーション」が行え、かつ「MELICと授業との連携の形を魅力的にわかりやすく提示

できる展示架」が欲しかった。

このような状況下に出会ったのが、松丸本舗という独創的な書店空間を展開していた松岡正剛氏<sup>2)</sup>率いる編集工学研究所(以下、編工研)だった。編工研と仕事を進めるうちに、私たちがうまく言葉にできなかった「企画の本質」が見えてきたのだ。これまでの教育連携企画や今回の展示架導入計画はMELICにとって「読書推進」を目的とした企画だったのだと。であるならば、松岡氏の力を借りて正面から「読書推進」に取り組むよい機会なのではないかと考えた。

こうして単に本を並べるための書架導入ではなく、書架を使った「本」と「人」のコミュニケーションが新たな読書の魅力を創り出し、読書推進へと繋げていく「共読ライブラリー」構想へと発展していく。

### 3. 「共読ライブラリー」とは何か

「共読」とは「本を薦めたり、連ねたり、読み合わせたり、評し合う」<sup>3)</sup>松岡氏が提唱する読書の形態である。現代では「読書は一人であるもの」というスタイルが主流だが、元来読書の主流は「読み聞かせ」や「読み合わせ」といった共読にあったという考えを基本としている。

「共読ライブラリー」における読書の考え方は次の5点である。

- 1) 読書を一人の行為として限定せず、読書で得た情報をお互いに共有したり、交換したりす



写真1 MELIC 1階のMONDO 書架

ることで、読書の価値や効果を高め合う

- 2) 実際の読書である「読中」に加え、本に接したり、本を選ぶ段階の「読前」、本を読み終わった「読後」までを読書として捉え共読を行うことで、共有する読書情報や本へのアプローチの手段を拡大し、新しい読書の魅力を発見する機会を増やす
- 3) 学生同士はもちろん、教員や職員さらに地域や卒業生や著名人などと共読を通して交流することで、読書へ誘引する好奇心の触発ポイントを増やし読書の楽しさ、深さに自ら気づくような様々な仕掛けを展開していく
- 4) 本についての情報や読書をする空間など読書の周辺環境をブックウェアと捉え、そのブックウェアを更新することで読書についての新しい発見や興味を持続、増幅させる。たとえば一冊の本を読むだけで終わらせるのではなく、その一冊に連なる本、関連する本へと繋げていく仕掛け作り
- 5) 読書にはその目的によっていくつかの「型」があり、それらに共通する基本的な「型」を学ぶことでこれまでとは違った読書の活用を可能にする

#### 4. 本棚プロジェクトとコミュニケーション

前述のとおり、「共読ライブラリー」は展示架作りからスタートした。プロジェクトの中でも最

初に着手したのが MONDO 書架企画である。2012年3月末に1階エントランスに MONDO 書架と名づけた黒板本棚群を設営した(写真1)。

この書架は文字どおり、書架に黒板塗装を施し、書架自体にチョークでコメントを書き込むことができる。黒板面は磁石が使えるので、強力マグネットを裏に貼りつけたオリジナルのブックサポーターで書架の前面に本を面陳したり、POPやポスターを貼ったりすることもできる。この MONDO 書架を使って始めたのが「College MONDO (カレッジ問答)」である。

College MONDO は以下5つのアンテナでそれぞれの対象と本を介したコミュニケーションができる仕組みになっている。

- 1) Special MONDO：ゲスト著名人が学生や教員の質問に本で答える問答棚
- 2) Career MONDO：キャリアを切り開く棚
- 3) Life MONDO：人生を豊かにする棚
- 4) Teikyo MONDO：帝京大学を発信する棚
- 5) New Books：図書館員が週替わりでオススメ本を紹介する棚

問答棚の中でも目玉企画である S-MONDO (Special MONDO) では利用者は本を3冊以上借りて応募用紙を入手し、自分の悩みや質問を書いて館内の応募箱に投函する。ゲストはその中から質問を選び、セレクト本とコメントで回答を返す。記念すべき第1回のゲストは女優の蒼井優さ

ん、お笑い芸人の又吉直樹さんをお願いした。特に又吉さんは読書芸人として大ブレイクし、その回答の内容もおもしろく、普段図書館に来ない学生層を誘引してくれた。

質問者とゲストの問答はすべて MONDO 書架で公開<sup>4)</sup>しており、コメントカードやセレクト本、関連本を熱心に読みふける学生の姿が多く見られる。MONDO をすることで、NDC で並べた通常棚では手に取られなかった本が次々と借りられていく光景は、書架を使ったコミュニケーションの可能性を実感させられるものだった。

## 5. 読書術コースウェア

本棚プロジェクトが図書館の中から共読の魅力を発信するプロジェクトとするなら、読書術コースウェアは教育との連携によって読書リテラシーの獲得を目指すものである。松岡氏の ISIS 編集学校の読書術レッスンを帝京大学の学生向けにアレンジし、3週間のオンライン読書術コースを実施した。初年度は教育学部1年生に試行的に導入した。学生はオンライン上で7~8名1組のグループになり、そこに1名のナビゲーターがつく。ナビゲーターから出題される全8問の読書術レッスンに回答していくわけだが、掲示板システムで全員の回答を読むことができる。レッスンを通して1冊の本(新書)を読み切るが、自分が選ばなかった本も他人の回答を通して、「共読」できる仕組みとなっている。

「本棚プロジェクト」「読書術コースウェア」に「広報ツール作成とイベント」「共読空間プロジェクト」を合わせた4つのメニューが「共読ライブラリー」の柱となっている。詳細は『大学図書館研究』<sup>5)</sup>に学習支援の視点から書かせていただいたので、あわせてご覧いただきたい。

## 6. 総合展出展の経緯

総合展への出展は、本格的にプロジェクトが動き出した4月から考え始めていたことだった。出展の理由は大きく2つある。

- 1) 本学の「共読ライブラリー」という企画を外部の多様な人々(図書館関係者はもちろん、学校関係者や教育関係業者、学生等)にブラ

ンドの一つとして認知してもらう機会であること

- 2) 学外の「共読ライブラリー」への評価を学内に還元することで一部署の企画と捉えられがちな「共読ライブラリー」を全学的な取り組みへと進化させること

もうひとつ、総合展への出展を決めた理由がある。それはここ数年の総合展が業者のための総合展から図書館主体の総合展へと変貌を遂げたことである。この変化によって図書館や教育関係者にとってより関心を引く企画が増えて、総合展自体の訴求力が高まっていると感じられたのだ。

そのため、私たちが「共読ライブラリー」を知ってもらう媒体として総合展への出展は費用対効果に見合うものだと考えられた。

共同企画の編工研の存在も大きかった。編工研は読書や編集を新しい形のプロジェクトとして具体化し、プロデュースするノウハウを持っている。空間演出や造作もお手のものである。「出展するなら、他のブースと同じではつまらない」「会場に MELIC の共読ライブラリー空間を再現したい」という MELIC の思いを現実的な形にプロデュースしてくれた。

## 7. フォーラム『「共読ライブラリー」が創る「人」「本」「学び」の未来』

会場の下見(説明会)から始まり、案内状・カタログ・サイトの紹介文の作成、フォーラムの申込フォームの作成、ホームページや学内での広報、当日の受付・案内誘導、整理券配布など何もかもが初めての経験だった。フォーラムとブース出展の準備で忙しくしているうちに、3日前にはフォーラムの申込数が200名の定員に達した。一方、フォーラム用の原稿は MELIC が担当し、上映スライドは編工研が担当したため、スライドが出来上がったのが当日の朝、完成版を見ないままフォーラム突入となった。さらに登壇者全員の内容打合せはフォーラム開始の1時間前という綱渡りの状況の中でフォーラム本番を迎えたのだ。

フォーラムの前半30分は松岡氏が『「共読」の本来と将来』と題して、日本における読書を取り巻く環境の問題点と「共読」を生み出すに至った

背景を語った。途中、MELIC 館長も登壇し「最近の学生はリアルなコミュニケーションの場が少ない。読書を通じて他者とのコミュニケーションを活発化して、人生を楽しんでほしい」と「共読ライブラリー」への意気込みを語った。

後半の60分でMELIC職員が2012年4月から半年を経過したプロジェクトの実施経緯、実際の活動内容、課題と展望を発表した。ここでは見出しのみ掲載させていただく。

1. 導入の経緯と全体像
2. 黒板本棚と共読システム
3. 読書術コースウェアと教育連携
4. 大学全体へのしかけ
5. 図書館員のレベルアップ
6. 共読ライブラリーの展望

フォーラムでの発表もMONDOを意識し職員同士の掛け合いを加える構成にした。フォーラムの時間内では伝えきれない部分も多く、用意したスライドの1/3は飛ばしてしまったが、ブース出展もしていることが、こういうときには心強い。「続きはブースでお話ししましょう」と声をかけると、たくさんのお客様がブースに足を運んでくださり、フォーラム直後は共読ブースに人があふれるほどだった。フォーラム来場者は大学図書館32%、公共図書館22%、企業38%、一般・学生8%という内訳だった。

一方、反省点も記しておきたい。①定員に達した時点でフォーラムの申込みを締め切ってしまったこと、②上映スライドの完成が当日でリハーサ

ルが全く行えなかったこと、③事前の準備に追われ当日の参加アンケートをとれなかったこと、その他いろいろ失敗はあったが次年度への改善点としたい（写真2）。

## 8. 再現した「共読ライブラリー空間」

展示ホールではアイランドブースで出展した。間仕切りもパネルもなく、自由にレイアウトを組むことができる48m<sup>2</sup>のスペースである。当然プロのデザイナーが必要になるため出展料と相俟って図書館としての出展にはハードルが高い憧れのブースだ。設営は編工研が担当し、空間プロデュースのプロが腕をふるった。

展示ブースでは「共読ライブラリー」の活動をリアルに伝えるために、MELIC1階で使用しているMONDO書架をそっくりそのまま持ち込み、共読空間を再現することにしたのだが、「よく考えるとそれってちょっと変わった本棚に本が飾ってあるだけじゃないの？」という不安がないわけではなかった。

しかし、現地で全高4メートルの共読黒板タワーを中心にMONDO書架6本を配置したレイアウトを見て、改めてプロフェッショナルのデザイン力を実感させられた。来場者の方々からも「共読ライブラリーのブースが一番目立っていた」という意見をいただいた（写真3）。

総合展前日の設営日には職員も5名ほど現地に赴き、約500冊の本を並べていった。以後、総合展中の3日間はMELIC職員の半数が総合展の業



写真2 「共読ライブラリー」を語る松岡正剛氏（左）と中嶋



写真3 「共読空間」を再現した展示ブース（中央が共読黒板タワー）

務に就くことになった。

映像も活用した。通路に向けては大型 TV モニターでこれまでの活動を編集したプロモーションビデオを流した。MONDO 書架には iPad を設置し、教員やゲストが自分の選んだ本について語るインタビュー映像を映し出した。

## 9. 共読サポーターがんばる

総合展で最も活躍したのは 10 月に発足したばかりの共読サポーターである。展示ブースの主役は明らかに共読サポーターたちだった。共読サポーターは「共読ライブラリー」に興味を持ち、職員と一緒に図書館を盛りたてる 18 名の帝京大生で構成されている。「目次読書法」「本棚作り」のワークショップを受けた上で Teikyo MONDO を作り上げた。総合展では常時 3 名がブースに入り、自分たちの本棚をどのような意図で作ったのかを来場者に説明した。たくさんのお客様に初めは戸惑っていた学生たちも、場をこなすうちに説明がどんどん上手になっていった。一生懸命説明する姿に「うちの図書館に連れて帰りたい」「一緒にコラボ企画をしよう」などたくさん声をかけていただいた。本人たちも「様々な業種の人と話せて有意義だった」「MELIC の魅力を発信したい気持ちが強くなった」と感想を寄せている。

すでに多くの大学がされているように、学生が図書館の運営に参画することは図書館の運営戦略にとって重要な要素である。学生が主体的に関わることで図書館は変わっていく。将来的にはこのサポーターを中核として「MELIC Book Club」を設立する構想である (写真 4)。

## 10. 総合展その後

総合展の共読ライブラリーブースは 3 日間で 2,000 名を超える来場者を迎え、共読黒板タワーにはチョークで書かれたたくさんの感想が残った。「うちの図書館でもやりたい」「自由さがたまらない」「発想力に感動！」など、たくさんの励ましのメッセージをいただき、私たちも多くの方々と交流ができ充足した 3 日間だった (写真 5)。



写真 4 高さ 4 m の共読黒板タワーと共読サポーター

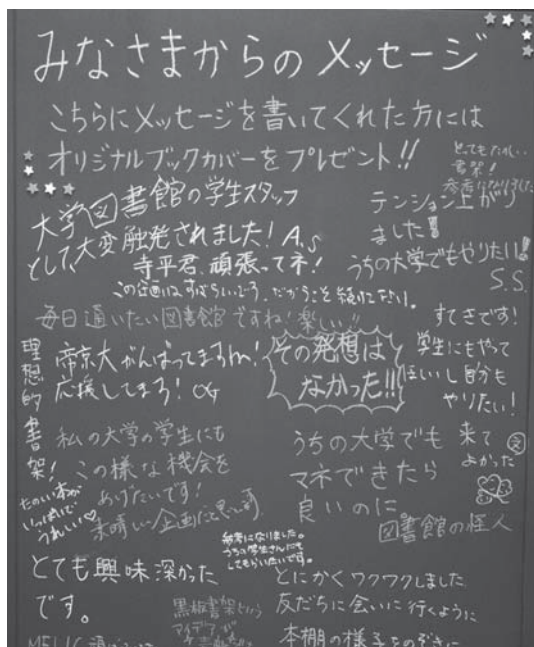


写真 5 寄せられたメッセージ

総合展終了後も反響は続いている。『薬学図書館』などからの原稿依頼、複数のメディアからの取材、図書館や企業の方から「共読ライブラリー」の見学依頼もあった。さらに新年の東京新聞<sup>6)</sup>には学生サポーターのコメント入りの記事が掲載された。また、総合展で知り合った他大学の学生から見学や交流の依頼もあり、学生サポーターの横のつながりも広がりつつある。

ブース出展によってこれまで考えてもみなかった様々な業種の人達と交流を図り、関係を作れたのは大きな成果であり、前述した総合展出展による費用対効果という面からも目標は達したと考えている。

4年計画の「共読ライブラリー」は現在2期目の準備の最中である。今期始めたCollege MONDOや読書術コースウェアを定着させること、共読サポーターが運営の中心を担うこと、WEB上でのリコメンデーションシステムを構築すること、それらを通して「共読ライブラリー」を全学ブランドとして確立していくこと。

おそらく今期以上に盛り沢山の企画になると予想されるが、また来年度の図書館総合展で報告できることを目標の一つひとつの企画を実現していきたい。そして病みつきとなったアイランドブースでまた皆さんと交流できればと考えている。

#### 注および参考文献

- 1) もちろん教育連携の進捗を評価する指標は貸出数だけではない。しかし一方で教育連携の効果

は必ず図書館の貸出に繋がるはずだと考えている。その意味でわかりやすい指標として私たちは貸出数を重視している。

- 2) 1944年、京都生まれ。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授をへて編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1971年『遊』を創刊し編集長をつとめる。1980年前後に「編集工学」という新しい領域を発案・構想。以降、情報文化と情報技術をつなぐ研究開発に広く携わる。一方、日本文化研究の第一人者として「日本という方法」を提唱し、私塾「連塾」を中心に独自の日本論を展開。2000年にウェブ上でイシス編集学校と壮大なブックナビゲーション「松岡正剛千夜千冊」をスタート。2006年に第1144夜までをまとめて『松岡正剛千夜千冊』（全七巻+特別巻）を刊行。
- 3) 文部科学省国民の読書推進に関する協力者会議“人の、地域の、日本の未来を育てる読書環境の実現のために（報告書）平成23年9月”。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/09/\\_icsFiles/afildfile/2011/09/02/1310715\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/09/_icsFiles/afildfile/2011/09/02/1310715_1_1.pdf), (参照2013-2-1)。この報告書の序文で「単に本を読むだけの読書ではなく、本を選ぶ、勧める、読み合う、本を並べる、贈り合うといった、いわば、「共読」にまで視野を広げてとらえることの必要性についても認識を共有した」として、「共読」が登場する。委員には編集工学研究所所長 松岡正剛氏が名を連ねている。
- 4) 又吉さんと蒼井さんとのS-MONDOの全質問と回答を下記サイトでも公開している。<https://apps.v.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/tos-kyodoku001.html>
- 5) 中嶋康ほか、〈共読ライブラリー〉が創る「人」「本」「学び」の未来～帝京大学メディアライブラリーセンターにおける学修支援～。大学図書館研究、(97)、2013.3掲載予定
- 6) 変わる知の拠点 図書館は今。東京新聞 夕刊文化面 2013.1.4

(原稿受付：2013.2.13)